文様から歴史と現在を考える

巽 由樹子

本書は帝政期ロシアの画家ミコラ（ニコライ）・サモーキシュ（一八六〇－一九四四）が、故郷ドニプロ川東部の古刺繍の文様を描いたスケッチ四〇点をまとめて一九〇二年に刊行したアルバム『ウクライナの装飾文様』を、フルカラーで複製出版したものです。

二〇二二年二月二四日のロシアのウクライナ侵攻は、この地域を専門とする歴史学者の多くを困惑させました。ロシア政府が歪曲した歴史解釈によってこの戦争を正当化したため、近年の研究がロシア帝国やソヴィエト連邦の諸民族支配を相対化する傾向のあったことが、政治利用を許してしまったのではないかと考えたのです。ならば今後どういう枠組で研究したらよいのか、国内外の学界で様々な議論が現れました。

そうした渦の中でふと、ウクライナに生まれてロシア帝国の中央で活躍したサモーキシュという画家を思い出しました。そしてこの二つの軸を彼はどう両立していたか、あるいはしていなかったかを知りたいと考えたのです。本書後半の解説では、「ロマノフ朝の御用画家」かつ「ウクライナの風俗を描いた画家」という二面性を持った彼が、現在と同様にロシアとウクライナの対立が高まり、さらに社会主義革命まで起きた激動の時代に、どのような生涯を送ったかを紹介しています。

ただ、侵攻以降、伝統的な民族文化とされるものがウクライナ支援の旗印にされることには少し違和感がありました。英国の歴史家ホブズボームが指摘して以来、「伝統」は近代に創造されたと認識されて久しいのに、私たちは今なお、侵略する側の論理ともなるナショナリズムから抜け出せないのかと思ったからです。こうした疑問から、サモーキシュが「ウクライナの」と名付けた文様が、本当に国や民族の境界で区切られるのかを確かめたいと考えました。そこで中欧、バルカン半島、ギリシア、トルコなどの刺繍の図案と比べると、実際にはウクライナの文様は国や民族、宗教の境を越えた伝播の中にあった、というのが、解説のもう一つのトピックです。

目下、戦争当事者にとってはナショナリズムが切実だという重い現実があります。一方で私たちは、「戦争のウクライナ」だけでなく、トランスナショナルな側面も含めてこの地域への理解を豊かにすることが、不条理の中で暮らす人たちに粘り強く関心を寄せるために大切ではないかと思います。

本書は文様から歴史を検証し、現在を考える作業でした。これを生かして、ロシア帝国史研究に再び向き合うつもりです。

たつみ・ゆきこ
総合国際学研究院准教授
歴史学・ロシア帝国史

『ウクライナの装飾文様』
ミコラ・サモーキシュ【画】
巽 由樹子【訳・解説】
2023 年 12 月刊